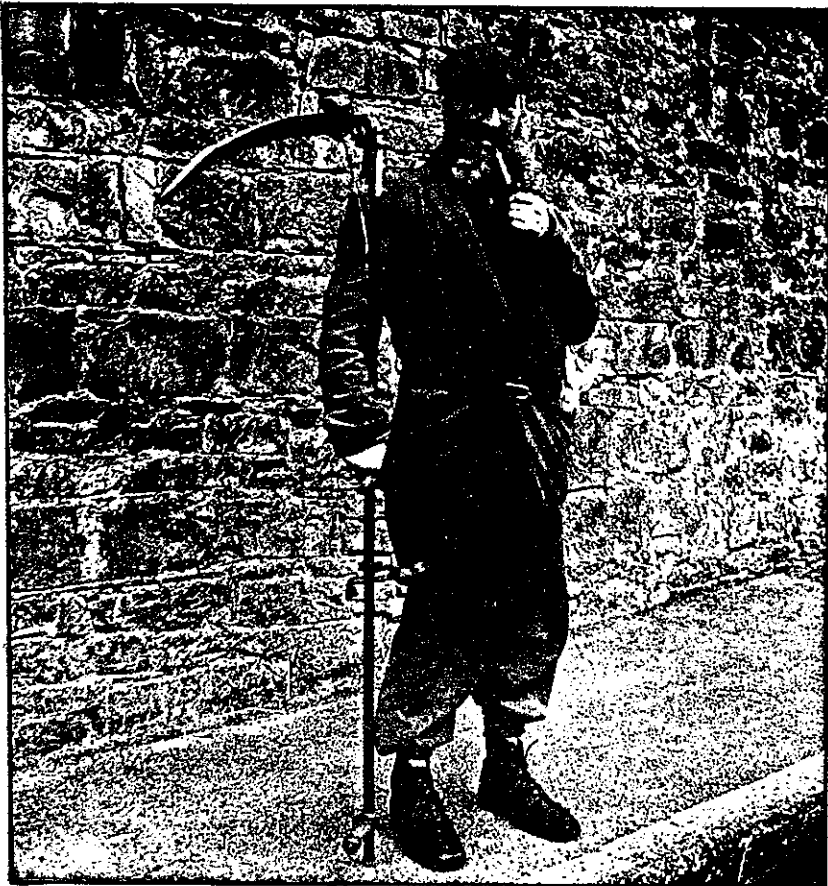




No.5

## British Trad Review



*"Have yourself a good look now, for when I'm gone you'll never see the likes of a man like me, again."*

# NEWS

(担当：兵藤充孝 大山聡 白石和良)

・昨年夏、アイルランドの Sligo<sup>スリゴ</sup>で行なわれた Ballisodare Festivalは、観客1万人余りを集め、ここ数年来のフォーーク・フェスティバルの中でも、その質においても最も目立った成功を収めた。この時の模様については、本号のメイン記事を。

・Fairport Convention は、バンバリーのウィンターガーデンで恒例のクリスマス・パーティを催した。例の如く、アナウンスなしで現われた彼らは、何と、“Walk Awhile”でステージを始めた。この曲は、もう何年もステージでは聞かれなかったとのこと。リード・シンガー不在といわれた彼らだが、すば抜けたシンガーのいないことが、かえって幸いしていたようだ。インストゥルメンタルでも、リズム・セクションが、かつてなくタイトになり、その外 Swarbrick が十分に活躍できるようになった。

この夜の曲目は、“Rosie” “Hexhamshire Lass” “Dirty Linen” “Ladies of Pleasure” として、“Poor Ditching Boy” といったもの。“Jams O'Donnell's Jig” では、ヘビーな演奏をくり広げ、Bruce Rowlandのドラム・ソロもきかれた。一方で“Sheebeg Sheemore” では味わい深い演奏でこの夜の最もすばらしい一時となったようだ。

この夜の印象では、彼らは、かつての「フォーーク・ロック」から「ロック・フォーーク」ともいうべき形に近づいているといえる、とのこと。



・Richard & Linda Thompson は“First Light”のプロモートのためのコンサートを行なった。メンバーは John Kirkpatrick, Sue Harriss の夫婦、リズム・セクションに Dave Pegg と Dave Sheen 。



Fairport

・どうも最近は大ブロード・オペラが盛んなようで（我々日本人には実体がつかみくいのだが）Peter Bellamy の手によるレコード“ The Transporters ” に続き、Albion Band（Martin Carthy を含む）が国立劇場で Keith Dewhurst の手による歴史劇 Lark Rise に役者として出演した。作曲は Keith Thompson によるものだが、音楽ディレクターは Ashley Hutchings。

・上記のオペラの成功により、次の Dewhurst による歴史オペラ“ The World Turned Up Side Down ” には、Albion の他に Maddy Prior も参加。

・なお M. Prior は Mike Oldfield（あの Tubler Bells の）のニュー・アルバム“ Incantations ”（Virgin VIP 9905 — 日本盤）に参加し、このアルバムのプロモート・コンサート（4月）にも参加する予定。

・トリオナが Linda Ronstadt の次のアルバムに参加するために渡米する。Linda は数年来の Bothy のファンだそうで、昨年11月には、Triona を招くためにアイルランドに渡り、フォー・クラブでステージを共にしたとか。リンダのレコードにはアイリッシュ・フォー・クワの他に、Triona のオリジナルも入らしく、一方 Triona は別に、ニュー・ヨークでクラブ出演もするという。



BILL LEADER

・正にその名のとおりフォーク界の Leader である。Bill Leader は、Transatlantic-Logo レーベルと5年間の契約を結び、彼らしい良質の作品をプロデュースし続けているが、会社の方針に明らかに不満なようで、今後、自分の会社を設立するかもしれないし、新たに、他のレコード会社と契約を結ぶかもしれない。

・待望の Liam Weldon の2枚目が、Mulligan から3月に出る予定。



THE ALBION BAND in Lark Rise



TRIONA NI Dhomhnaill

・去年後半の最大ニュースだったのが、Planxty の再編であり、それに伴う Bothy Band の解散説が流れたことである。実際、Planxty は再編成する。再編メンバーは、オリジナル・メンバーの4人 — <sup>ドナルド</sup>Donal Lunny, <sup>リアム</sup>Liam O'Flynn, <sup>クリスティ</sup>Christy Moore, <sup>アンディ</sup>Andy Irvine — それに解散前に少しの間加わっていた <sup>ポール</sup>Paul Brady, Bothy Band から <sup>マット</sup>Matt Molloy, この6人である。この再編メンバーに現 Bothy の2人、Lunny と Molloy が含まれていたため、Bothy の解散説が流れたのだが、この心配は杞憂であった。

Bothy は、3月23日のロンドン・カムラン・ホールを皮切りに国内コンサートを行ない、好評だったバリエーションのライブをレコード化する(春発売予定)。なお、再編 Planxty は、イースター・サンデー(復活祭日)にあたる4月15日、ロンドンのハマースミス・オデオンを皮切りに国内をツアーし、さらに、ヨーロッパツアーも行なうようだ。

(この記事は、Melody Maker 紙からとったものだが、Folk News 紙では、P. Brady はこの New Planxty に加わるとはなっていない。この点に関しては、4月になれば明らかになるだろう。)

・ Bill Leader のプロデュースによる好アルバムを Transatlantic-Logo レベルから発表した Mick Ryan & <sup>ジョーン</sup>Jane Burge は、<sup>シリラス</sup>Silas と名のる2人組と一緒にグループを作った。名は Crows。



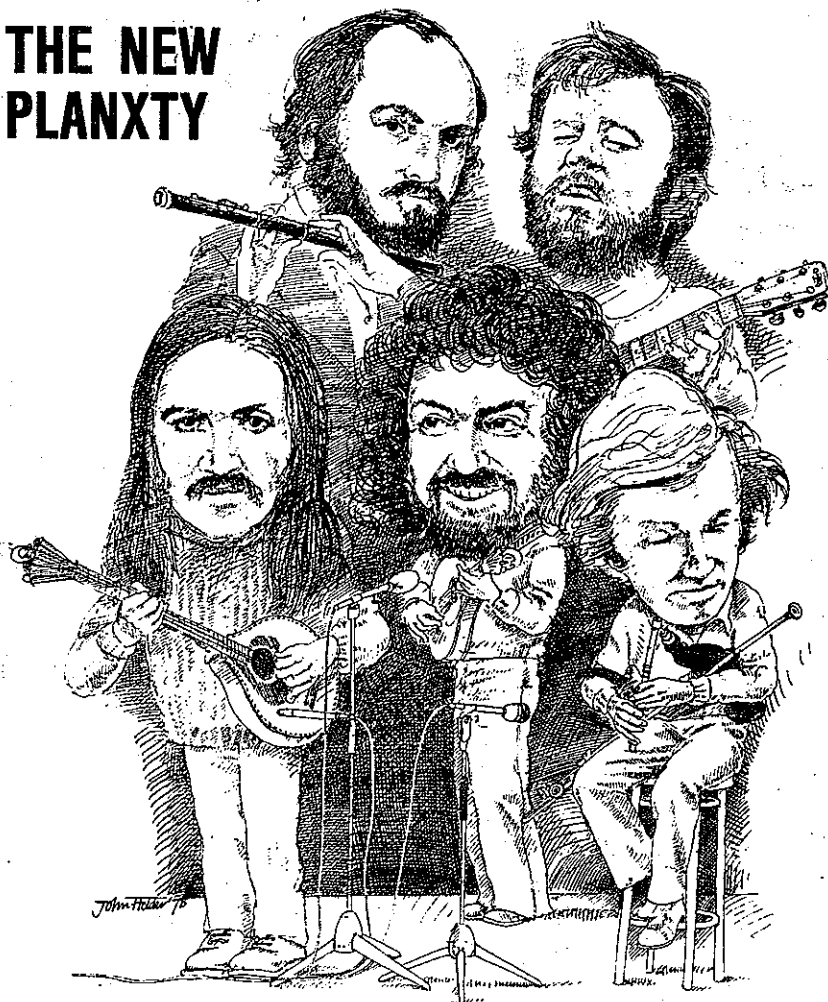
Paul Brady with a Lunny "blarge".

・ Martin Carthy のニュー・アルバムが、3月初めに TOPIC から発売される。タイトルは "Because It's There"。興味深いのは、Gilbert O'Sullivan のヒット曲 "Nothing Rymed" で始まり、この曲がラストから2曲目でもう一度繰り返されていることだ。インストゥルメンタルも一曲入っていることから、かなりトータル・アルバム的なつくり方をしているものと思われる。パートナーは、John Kirkpatrick と Bruce Rowland。



Hohner melodeons in evidence during a session in the Eagle, Bampton, at Whitsun. From left: Francis Shergold (Squire of Bampton Morris), Martin Carthy, Rod Stradling and Reg Hall (both musicians for Bampton Morris).

# THE NEW PLANXTY



**DONAL:** It's going to be new, so why the hell not?

**MATT:** They asked me, and I was delighted to accept.



**LIAM:** I play the only way I know how.  
**ANDY:** I can't think of anything better.



**CHRISTY:** We won't play old material.

from Folk News

# 'THE BOYS OF BALLISODARE'

## 'アイルランド'の野外民謡祭'

(西野 陽一)

《アイルランドへ》

さて、ダブリン行きの列車に乗ったものの、フォーワ・フェスティバルが開かれる、パーセダルなる所が、どのあたりにあるのかさえ分らなかったのだから、先行きにいささかの不安はあった。でも夏のロンドンの混雑ぶりと、連日の冷たい雨には、もうへきえきさせられていたし、日に何度となく利用する地下鉄のきたなさと、電車の起こすほこりっぽい風にも、(い)かげん(い)や気がさしていたので、もう長居は無用と思ったのだ。フォーワ演奏に関しても、夏場は地方で盛んにフェスティバルが、催されるためだろう、ロンドンでは、これと思う人にめぐり会えなかった。そんな時、フォーワ・ニュース紙を見ていて、数日後アイルランドでフォーワ・フェスティバルが開かれる、という記事を見つけた。まずダブリンへ行こう、ジョイスに引かれる気持もあったし、行けばなんとかなると思った。

ダブリンに着いたのは夜の8時すぎだった。宿がみつからなくて、労働者宿に泊ったが、その夜は、ジョイスの主人公と、宿に来る人々がオーバー・ラップして、寝つけなかった。やはりアイルランドとイングリランドの国民性の違いはあるようで、僕はここで人なっつく、気どりのないダブリンナーの人柄にふれ、すっかりアイルランドびいきになってしまった。

《スライゴのこと》

めざすパーセダルは、ダブリンから列車で4時間ほどの、アイルランド北西の町スライゴから、さらに南へ8キロほど行った田舎の、数えるほどの人家のほかには、パブとマーケットが目につくばかりの小さな町だった。さて、宿をとったのは、列車の着いたスライゴという町だが、ここはたいへん民謡の盛んな所だった。フェスティバルにも参加した、地元の演奏者達、さらには、この地方で採集された民謡がレコードになり、楽器店に並んでいた。こんな小さな町で、こんなフェスティバルが開かれるには、それなりの理由があったわけだ。僕がスライゴに着いたのは、フェスティバルの前日だったが、夕刻にはリュックを背負った人達が、三々五々集まってきた。そんな中には、楽器をとり出し、辻音楽師に早がわりする者もいて、またそれをとり囲んで人だかりができる、といった様子が民謡好きの町の人々の乗情をよく伝えていた。

《フェスティバル会場》

この野外フェスティバルは、8月11～13日の3日間開かれた。入場料は3日通して5。第2回という事、また、フォーワ・ニュース紙などが大きくとり上げていた事もあって、宣伝は十分ゆきとどいていたようだ。英国はもちろん、欧州(特にフランス)や北米からもつめかけ、5千人以上は集まっただろう。ほとんどは、テントの用意をしており、僕のようにスライゴからヒッチで、という者はまれだった。会場には、メイン・テントがT字型に張られ、Tの交わる位置にステージが設けられた。ステージのようすは、ちょうどボス・バンドの“Out Of the Wind...”のジャケット裏写真が、その感じを良く伝えていると思う。そのメインテントを囲み、ビールや食物、楽器やレコードを売るテントが立ち、さらにゲートをはさんで、そのまわりを、山すそに続くなだらかな丘にまで、数百のキャンパー達のテントが埋めつくし、まさに、お祭りの様相を呈していた。プログラムは金曜の夜、土曜の昼と夜、



AUGUST 11th, 12th, 13th, 1978

2nd ANNUAL FESTIVAL — 5 GREAT CONCERTS WITH THE CREAM OF IRISH AND INTERNATIONAL FOLK TALENT.

Sean Cannon  
Owenmore Ceili Band

Friday Night.	Sat. Afternoon.	Sat. Night.	Sun. Afternoon.	Sun Night.
BOYS OF THE LOUGH CLANNAD. CHRISTY MOORE. P. J. CROTTY & JUNIOR CREHAN. PRESS GANG. P. BYRNE AND B. SHALJEAN. OISIN.	MARTIN CARTY. PAUL BRADY. DE DANNAN. JOE McDERMOTT & TOMMY FLYNN. SEAN GANNON. NICOLAS TOIBIN. OWENMORE CEILI BAND.	TOM PAXTON. CHRISTY MOORE & ANDY IRVINE & OTHERS. PAUL BRADY. LIAM O'FLYNN MICK HANLY. NICOLAS TOIBIN. RICK EPPING.	BOTHY BAND. TOM PAXTON. LIAM O'FLYNN. ANDY IRVINE. THE PRESS GANG. IORETTA REID. SEAN CANNON. BOYS OF THE LOUGH.	CLANNAD. MARTIN CARTY. DE DANNAN. JOSIE McDERMOTT & TOMMY FLYNN. MICK HANLY. P. J. CROTTY & JUNIOR CREHAN. B. BYRNE & B. SHALJEAN.
Admission £1.50.	Admission £1.50.	Admission £2.00.	Admission £2.00.	Admission £2.00.

日曜の朝昼夜の6部構成。病気という理由で、残念ながら出演しなかったマーティン・カーシーを除き、予定されていた人達は全て出演した。

(すばらしかった3日間)

初日は雨だったが、それでも盛況で、テントに入りきれない人達がずいぶん居た。

午後8時、司会の紹介で現われた、アイルランド出身のシンガー、Sean Cannonから始まり、地元出身のグループ、Owenmore Ceil Band。これも地元出身で、すばらしいホウィッスルを聞かせた Loretta Reid。イギリスでも人気のある、ホウィッスルとハーブのコンビ、Packie Byrne & Bonnie Shaljean、De Dannan、Paul Brady、Boys of the Lough。と約4時間半、あつという間に過ぎてしまった。Boysはこの日不調で、期待はずれだったが、De Dannanは、まとまりのある良いグループだった。Johnny Moynihanはグループをぬけていて、代わりに Tom Lyonというボーカールが入っていたが、彼の歌は絶品だった。

2日目は、晴れ間ものぞいたが、昨日来の雨で下はグチョグチョ、それでも土曜という事で、聴衆は近郊の軒から車で、ぞくぞくとつめかけた。この日の開演は、1時半だったが、フォーワ・ニュースに載っていた、2時半開演のプログラムを信用していた僕が着いた時には、再びオウエンモアがステージに上っていた。次いで4人組のボーカル・グループ、Press Gang、Clannad、Christy Moore が出演して昼の部は終わった。夜は、アイルランドの代表的シンガー、Nicolas Toibin から始まり、トラッドをベースにしたオリジナルを聞かせる Rick Epping、Planxty と親しか

ったグループ Munroe の片割れ Mick Henly、とステージに立ち、待ちかねていた元 Planxty の面々が、次々に登場し、すばらしい演奏を展開した。

3日目は、再び朝から雨だった。この日の朝の部は、Sunday Morning Workshop と称して、アメリカ(たぶんカントリー)音楽とスライコ民謡の交流が行なわれ、Matt Molloy (ホイスのフルート奏者)も出演するはずだった。ところが、昨夜、帰りが遅いという事で、宿の主人を怒らせてしまい、朝には宿を追出された為、荷物をまとめたり、ごたごたして(て)時間に間に合わなかった。会場に着いた時には、だれやら知らない人達がステージを降り、Oisín が現われた。どうやら朝と昼の部は、休みを入れず続けているようで、Oisín の次には、Boys が再びステージに上がった。この頃から聴衆はふくれ上がり、テントの横幕はすべてはね上げられ、時々激しくなる雨足の中に立ちながら聞いている人もいた。そんな中で、P.J. Crotty & Junior Crehan (Crehan はフィドラーで、プランクシティの1stアルバムに入っている Junior Crehan's Favourite という曲の Crehan だ)や、フルートとフィドルのデュオ、Josie McDermott & Tommy Flynn 5ベテラン組がステージにあがり、Press Gang が5・6曲歌った後、再び元プランクシティの再演が行なわれた。次いで Bothy Band が、これもすばらしいステージを2時間近くくりひろげ、昼の部が終った。

夜の部は、初日すばらしいホウィッスルを聞かせた、ロレッタ・レイドの(いる) Jig Slip で始まった。Jig Slip は彼女の他に、ドラム、フィドル、ボーランの4人組の地元グループだったが、ロレッタの魅力は、このバンドでは十分発揮できていないと思った。

その他にこの夜は、Packie & Bonnie, Mick Harry, Tom Paxton, De Dannan 5が出演した。T. Paxton は、全英リアー中で、彼の出演はやはり僕には異和感があったが、まわりの連中は、良い音楽を楽しめばよいといった顔で、彼のステージに何の外連も感じてない風だった。また実際、彼のステージはすばらしかった。

そして、3日間のフェスティバルの最後を飾ったのは、Clannad だ(クランナダと読むはずだと思っただが、むしろではクレスナドといっているように聞こえた)。クレスナドのステージは、最後を飾るにはふさわしいものだった。だけれども、もう間もなく幕をとじるお祭りの最後のひとときを惜しむように、クレスナドの演奏に耳を傾け、テンポの早い曲には手拍子を合わせ、最高の盛り上がりを見た。メンバーがステージを降りると、会場を埋めた全員が総立ちになり、クレスナド/クレスナドノの大合唱が起る一最高潮の中で、アンコールは3回行なわれた。最終日のそういう雰囲気はあったにせよ、やはり、全員がアンコールを求めるほどクレスナドのステージはすばらしかった。そして Maire (クレスナドの女性シンガー)の“Good by”の一言を最後に、フェスティバルは幕をとした。

《クレスナド、プランクシティ、ポスィ・バンド》  
さて、ここでもう一度フェスティバルをふり返って、3つのグループについて少しずつ触れておきたい。

#### ～ Clannad ～

演奏を聞いて、1stアルバムあたりのおっとりした感じに比べ、メリハリの効いたインストゥルメンタル

が前面に出ていて驚ろかされた。Nil Sé Ina láなどレコードでは少し自信なげだったフルートやベースが、すごいアドリブを聞かせたりする。ここ1年あまりで、英国での人気が高まってきたというのも由なきかなと思う。でも一方、テープを聞いてもらった人の中には、以前のクレスナドに愛着を感じるという意見もあって、そういう意見も良く分る気がするのだ。クレスナドは演奏も選曲も、商業的な方向もつかんだ、でもそれによって、なおざりにされたものも有るという事なのだろう。アレンジにクラシックやジャズの感覺(特にジャズ指向が強い)を感じる事、女性ボーカルの声などで、あのパンタンケルが引合いに出されているが、確かに似た部分はある。帰ってきてから、スイス録音のライブ・レコードを聞かせてもらったが、どうもフェスティバルのステージと一味違うという気がする。会場の雰囲気も異なるからか、フェスティバルではもっとのびのびしていたし、1曲の時間も長く、アレンジも少しずつ異っていた。

#### ～ Planxty の再現 ～

11月の定例会の帰り、名古屋の川村さんにプランクシティの再編を聞かされて、驚ろいてしまった一ひょっとしたら、このフェスティバルがそのきっかけではなかったかと。

2日目の様子はこうだ。まず Liam O'Flainn が、ウリン・パイプのすばらしい独演を聞かせてくれたが、彼は自分の演奏が終わると、ステージを降りてしまう。代って Paul Brady が現われ、3曲ばかり歌ったところで、Andy Irvine を呼び、デュオで3曲ほど演った後、Irvine はステージを降り、再び Brady のソロが数曲。彼のステージが終わると、今度はまず、



Clannad



Irvine が現われ、次いで Brady と、屋に出演してすごい人気だった Christy Moore が登場し、3人でプランクシティ時代の曲を聞かせてくれた。できれば O'Flainn も……と願ったが、そううまくはゆかず、この日は終わった。ところが3日目は、Moore も Brady も出演予定など無いので、こういった試みもされないものと思っていたのに、Irvine のステージに Moore と Brady が加わり、さらに遅れて、O'Flainn も登場して、“Merrily kissed…” や、“Jonny Cope ” といった Planxty 時代のなつかしい曲が次々に演じられた。どれもこれも良い演奏だったが、瀟々と歌いかける Moore の声はすばらしかった。



Paul Brady

～ボスイ・バンド～

メンバーに変動はなく、OAK4号の小川さんの記事にある若いフルート奏者は、このフェスティバルでは姿を見せなかった。Triona の歌は少なかったが、やはりすばらしく十分堪能することができた。小川さんの記事と重複するので、ステージの様子は省こうと思うが、Lunny の言う「もっと大きな音で……」というのは、実行されていて、フェスティバル1の音量だった。ボスイ・バンドに対する好き嫌いは、おもしろいほどはっきりしていて、僕の横にいた青年は、ボスイを目当てに来たのだと言い、知り合いになった地元の青年に僕が、「ボスイ・バンドは好きだ」と言うと、変な顔をされた。アイルランドで読んだ記事で

は、ボスイは“フォーク界の急進派”という扱いをされていたのも興味深い。

《その他の出演者》

まず、Boys Of The Lough について言うと、初日の演奏は期待はずれだった。De Dannan や Brady にアンコールが繰り返され、出が遅れたせいとか、アルコールのほうもかなりまわっていて、McConnell はフルートの調子が出ないし、Norton もさえなかった。だいたいビール両手にステージに上るなんて、いつぞや来日したイギリスのグループみたいで、立派なマナーじゃないと思う。お得意のアップ・テンポな曲も2日目はともかく、初日はもう一つ、McConnell のホウィッスル2本奏きなんか、かえって白々しい感じがした。

その他、全て良かったが魅力ある5つのグループについて、そのステージを紹介したい。



Boys of the Lough.

～Owenmore Ceili Band～

オウエンモアは地元出身のグループで、レパートリーは全てインストゥルメンタル。日本にもレコードは入っているらしいが、フィドルが3人、フルートが2人、それにマルチ・プレイヤーが2人いて、ボーラン、アコーディオン、ホウィッスルを担当していた。フィドルの3人以外は父娘の関係で、娘の1人 Deidre Collins は、フルート、アコーディオン、ホウィッスルに全アイルランド・タイトルを持つとかで、さすが演奏は老練なものだったが、悪く言えば、うまいだけというバンドだった。

～Loretto Reid～

初日の最高の聞きものは、このまだ若くて美しいティン・ホウィッスル奏者だった。その演奏は実に力強いもので、わずか30cm 程度のオモチャのような笛

に、こんな活力が秘められているなんて、全く驚きだった。こういった(ちょっと尻八を連想してしまった)奏法が、伝統としてあったものかどうかは分らないが、僕にはとても今様に聞えた。ドブロ・ギターとのデュオだったが、これは無い方が良かった。なお彼女は、Jig Slip の一員として最後の夜にも出演した。

～ Packie Byrne & Bonnie Shaljean ～

Packie のホウィッスルと Bonnie のアイリッシュ・ハーブの組み合わせは、成功していると思う。Bonnie はオルガンも奏していたが、カリフォルニアの出身で、ピアノを学んでいたそうだ。75年のフェスティバルで知り合い、デュオを組み、アルバムも1枚発表している。親子ほど年齢の違う2人だが、会話の方も妙を得ており、BBCのラジオ番組やTVのコマーシャルにも出演している人気者らしい。

～ De Dannan ～

アイルランドの Galways の出身のグループで、75年の結成。2ndアルバムには、元 Planxty の Johnny Moynihan が入っているが、彼はもうグループをぬけていて、代りに、Tom Lyon というボーカルが入っていた。レパートリーは、ダンス曲が中心だったが、この Tom Lyon のシンギングは絶品だった。ポーランが、ジャズ・ドラムのようなソロ演奏をしたりしていたが、全体としてはオーソドックスなスタイルの、まとまりのある好感の持てるグループだった。



DE DANNAN

～ Oisín ～

ギター、フィドル、マンドリン、バズーキといった弦楽器の4人に、ポーランとリコーダーを担当する女性ボーカルの Geraldine McGowan を加えた5人組。楽器編成は異なるが、Bothy Band に少し似た感じだった。弦の音は美しかったし、女性ボーカルも印象的な良い声をしていった。

《 最後に 》

アイルランドは活気に満ちていた。町はうらびれて、寒々としていたが、ロンドンで感じたような疎外感は無かった。

コンサートの終わったのは、午前2時近かった。最後に出たクレナドのメロディが、頭の中で渦をまいていた。5時にスライゴを出る列車に間に合えばよかったが、寒くて、道を急がずにはいられなかった。町につづく真暗な道に、濃い霧が出て、その中から時々車のライトが浮び上がり、また消えてゆき、ケルト民謡の世界を作っていた。民謡といえば、やはりアイルランドには妖精がいるのだろうか、町が見えた時、確かに東の空が白んでいたのに、駅にたどり着いてあたりを見まわすと、ただ真暗闇の中だった。

このフェスティバルは今年も開催されるはずだ。妖精達と再び会うためにも、ぜひ、もう一度この町を訪ねてみたい。



OISIN

# “Fair Is the Trad.”

(大島 豊)

’78年はトラッド・シーンにとって、’76年、’77年に比べれば、目立った収穫の少ない年でした。だからといって早急にトラッドの衰退とが言われるべき態のものでももちろんありません。トラッドは一年や二年のレンジで計るべきものではないからです。むしろ一年一年着実に積み重ねていくことで継承されていくものでしょう。無論トラッドといえども時代の影響を逃げないはずはありません。というより、一倍感な方といえます。従って、’76年、’77年の状況も単なる偶然の結果であります。しかし、何百年も生きぬいてきたうたを相手にする時、変化の急激な現代に慣れた私たちの近視眼的傾向は、戒めなければなりません。

トラッドは常に時代と相剋しています。時代が移ると共に、人々の生活は変わります。人々の日々の生活の上に立っているのがトラッドです。変わっていく人々の生活と、変わらぬ価値を求めるトラッドの相剋がそこに生まれます。その相剋がトラッド独特の緊張感を生み、「うたの反世界」を生み出しているのです。数々の「危機」を経て、消えるうたもあり、また新たに生まれるうたもあります。そうして残ったうたはますます美しく、そして強くなってきたわけです。

かつて Fairport や Steeleye が体現したのも、あるいは’76年から目立ち始めた、「レコードとしての魅力」を考えたものも、そうした相剋の上に生まれてきたものです。トラッドは、古いものを後生大事に抱えこむことで続いてきたものではありません。自らをとりまく時代へ絶えず挑戦することで、その生命をかちとってきたのです。だから、トラッドにおいて、よきレコードとは、「時代」の混沌の中から、かちとるべき生命＝トラッドの「魂」ともいうべきものを掘みとり、次に受け継がれるべきものとして示している、そういうものでありましょう。

’78年に出たレコードの中で、その例として真先にあげなければならぬのは、Dave Burland, Tony Capstick, Dick Gaughan の3人が大先輩、Ewan MacColl のうたをうたった“Song of Ewan MacColl” (Rubber Rub 027)です。よき古きものが生残ることの難い現代に、新たな伝承に挑戦して、見事な成果をあげた3人への拍手を送ります。ここでの D. Gaughan は、’78年に出たソロや 5 Hand Reel での無節操さとは違って、彼本来の抑えた歌唱を聞かせてくれます。

トラッドはもちろん民衆のものであり、その題材は多岐にわたっています。そこには当然信仰もあるわけです。バラッドによく見られる超自然現に代表される、ケルト的な土俗信仰もその例ですが、一方でキリスト教も無視するわけにはいきません。もっともトラッドから私たちが受けていたイメージは、アンチ・クライストの観が強いものでした。

The Waterasons の“Sound, Sound, Your Instruments of Joy” (TOPIC 12TS 346) は、そんな「偏見」に衝撃を与えるものでした。ここに聞かれるのは、まさしく民衆の宗教音楽です。素朴な、それ故何にもまして強い信仰のこころをもって、「神」を讃えたうたは、よろこびに満ちています。ここには、おあげさな威厳やきらびやかな装飾は、全く見当りません。そうしたものは、「教会」のためのもので、人々にとっては不必要だったのでしょう。「神」と接することの率直なよろこびに満ちて、うたは美しく、4人の完璧なコーラスと巧みなアレンジによって、一層光り輝やいています。トピックはそのすばらしさに応えて、初のダブル・ジャケットを与え、全曲の歌詞を添えてくれました。’78年初頭を飾った名盤です。

トレイラーにかわって、リーダー・トラディションによって相変わらず活躍する Bill Leader はやはり唯者ではありません。’78年は、“Bandoggs” (Transatlantic LTRA 504), Mick Ryan & Jon Burge の“Fair Was the City” (同 LTRA 506), そして、Nic Jones の“From the Devil to a Stranger” (同 LTRA 507) の3枚を届けてくれました。

とりわけ、Martin Carthy を思わせる硬質の声を持つ M. Ryan のヴォーカルは、久しぶりに現われた、本格派の大型速球投手というところ。それを支える J. Burge の演奏 (g., fd., md., vo.) もヴォーカルとバランスのとれた骨格のしっかりした見事なものです。レコード・デビュー以前の7年間のフォーワッド・クラブでのキャリアを実感させてくれます。筆者のブライテスト・ホープ・オヴ・ジ・イヤーズ。

N. Jones の4枚目のソロは、彼の絶頂ともいえるものです。レコードという、マスコミュニケーション手段とは本質的に相入れないトラッドの世界において、レコードをうたの継承のひとつの道と考える彼の、独立宣言ともいえるでしょう。そして、それ故に、彼の



次のLPがどのようなものになるか。トラッドの将来を占う上において、甚だ興味深いものがあります。

トラッドを現代においてよりアウティンに継承していく試みのひとつとして、Bandoggs が産声をあげました。デビュー・コンサート・ツアーの不調にもかかわらず、初のLPはすばらしいものでした。この後、N. Jones はソロを出し、Pete & Chris Coe は New Victory Band に参加して、アルバムを発表しています。(New Victory Band "One More Dance & Then" TOPIC 12TS382)

彼らの特徴は何よりもグループとしてうたうことへの姿勢にあります。同じアコースティックのグループでも、Boys of the Lough, あるいは Battlefield Band やアイリッシュの諸グループに比べて、明らかに「うた」に比重が置かれています。4人の誰もがリード・ヴォーカルをとれるということもみても、バンド結成の目的が、そこにあることは明らかでしょう。その意味では The Watsons と比較されるかもしれません。彼らの毅然とした態度とは対照的な Bandoggs の姿勢は、しかし非難されるべきものではありません。むしろ、より多くの実験を重ねて、すばらしい成果をあげることが期待すべきでしょう。

さて、トラッドの大きな魅力のひとつが、閉ざされた空間内での、ある暗い色調の緊張感にあるとするならば、Shirley & Dolly Collins の "For as Many as Will" (TOPIC 12TS380) は、そのひとつの典型でありましょう。Shirley のすすけた声は、もともと古風なものですが、Dolley のアレンジによって、ヴィワトリア様式の格調の高さを思わせるものになっています。その基本色は、Phil Pickett, Michael Gregory, Barry Dransfield とい

たバックによって、Dolley のシンセサイザーの使用によっても、少しもゆらぐことはありません。R. Thompson の曲さえ、Dolley のピアノをバックに、Shirley がうたうと、とても20世組の曲とは思えなくなってしまう。Ashley Hutchings との別れの傷を癒すが如く発表されたこのアルバムは、The Oldham Tinkers の "For Old Time's Sake" ('75) と並んで、ひとつの小宇宙をつくらせています。

'76年に Andy Irvine とのすばらしいデュオ・アルバムを発表した Paul Brady が、一段とすばらしいソロ・アルバムを発表しました。"Welcome Here Kind Stranger" (Mulligan LUN024) で



す。Johnstons, Planxty を通じてこの彼の10年にわたるキャリアの中でも、ベストといえる出来栄です。とかくヴォーカルの弱いアイルランドにあって、無伴奏で充分聞かせることのできるシンガーの出現はうれしい限りです。Lian Weldon を始めとして、Vin Garbutt, Chrity Moore, そしてこの Paul Brady といったアイルランド出身のシンガーの一層の活躍を望むものです。イングランドやスコットランドの硬いシンギングとは別の、柔らかく包みこむような彼らのヴォーカルもまた魅力的なものなので、Johnstons 時代からのインストゥルメンタルの腕も円熟して、トラッドの「スター誕生」というところでしょうか。



その Vin Garbutt, '78年はトビーンからLPを発表しました。'77年に限定盤で出た "Eston California" (12TS378) も、同時に一般発売されました。どちらも見事な出来ですが、とりわけ '78年の "Tossin' a Wobber" (12TS385) は贅肉をそぎ落した傑作です。A面のアメリカン・マティアルも、"Folk Review" あたりでは「唐突だ」などといわれていますが、彼のあの独特なシンギングにかかると、アメリカンともアメリッシュともつかぬ不思議な魅力を持っています。ひとりで何もかもやっていた彼ですが、今回は、ホイッスルやチェロで何人かの友人に助けられています。その音の広がりも、決して散漫などありたいへんのものではありません。作曲の腕も相変わらずで、Ewan MacCollの衣鉢を継ぐ、ミントレル、Vin Garbuttの面目躍如たるアルバムです。

アイルランドからもう1枚。同じライブでも、Chieftains のライブ (CBS 82985) は、Steeleyeのものとはわけが違います。もともと Chieftains や Bothy Band をはじめとするアメリッシュ系のバンドは、レコードよりもむしろステージの方が本当の魅力を出せるでしょう。このライブでは、ジワリリアルなすばらしさはもちろん、スロー・エアをフィドルとかけあいで奏でるアメリッシュ・ハーブには聞きほれるしかありません。全編インストゥルメンタルのLPをAB両面一気に聞かせて見事。解散した Bothy Band もライブを出すとかで、今から楽しみです。

'78年、Flying Fish から出た "Philadelphia Folk Festival 1977" でも De Dannan がすばらしい演奏をきかせてくれています。ちなみにこのLP (FF064) では、Tom Paxton, Norman Blake, Kate Wolf といった連中にまじって、Louis Killen と Debbie McClatchy の二人が見事なトラッド・シンギングを披露しています。後者は Frankie Armstrong を思わせる女性シンガー。イギリスには、まだまだこんなシンガーがゴロゴロしているのでしょうか。

Steeleye Span の解散は、やはりいかほどかの感慨を抱かせられずにはおかれませんでした。とはいっても、'78年2月に小川氏がロンドンで録音してこられたテープを聞いた時、解散もむべなるかなという思いがよぎったことも事実です。レコードとして出たライブ "Live at Last!" (Chrisalis CHR119) は、そのテープからは思いの他のできではありません。けれど、一方で Fairport の新作と並べてみると、どこか無理の感じられるものです。初期 Steeleye とは違うとはいいいながら、ついにあの3枚のアルバムに對置できるものを生み出しえないまま、彼らは解散してしまったのです。ひとつの時代に結着をつけるというよりは、それをなしくずし的に終らせた観があります。ということは、彼らこそ、'70年代という時代の影響に最も忠実だったのかも知れません。

'77年に、Simon Nicol の復讐によって息を吹き返した Fairport Convention は、"Tippler's Tales" (Vertigo 9102022) を発表しました。"Jack O'Rion" で小細工を弄しすぎて失敗しているのを除けば、これは彼らの久々の快作といっていでしょう。特にB面の快さは "Angel Delight" をもしのぎます。ここにみられる軽快さは、かつての Fairport にはもちろんなかったものです。それが、まさしく新生 Fairport として、形をなしていけば、



FAIRPORT

もうひとつの“Full House”を生み出すことも可能でしょう。またそれが十分期待できる内容をこのアルバムは持っています。“John Barleycorn”のアレンジは秀逸。

’78年上半期に Albion Band の一員として私たちに絶望させた Ashley Hutchings は “Kickin’ up the Sawdust” (EMI SHSP4073) で見事に汚名をそそいでくれました。“The Compleat Dancing Master”と同様、トラディショナル、リヴァイヴ、イグナル混成のメンバーによって、彼本来のイングリッシュ・ダンス・チューンを集め、Hutchingsは、彼にしかできないアルバムを作っています。ジャケットに“An Ashley Hutchings Production”と銘う

った彼の自信を体現して、これはただのダンス・チューン集にとどまらない、エレクトリック・トラッドの傑作といえます。ライナーには踊り方が詳細に解説されていて、このレコードは聞くためのものではなく、まさしく踊るためのレコードです。

Rubberは“Songs of Ewan MacColl”とともに、Hedgehog Pieの“Just Act Normal”(Rub 024)を世に送りました。近年あまりパツとしないエレクトリック・トラッドの中では秀作です。ウィリン・パイプの使い方もうーエ夫欲しいところ。けれども、それを除けば、Dave Burlandのヴォーカルを中心にした演奏は、かなりの水準をいくものです。ドラムレスのシンプルなダンス・チューンもさわやか。このLPと聞き比べてみると、“Songs of …”でD. Gaughanをひっぱったのも、D. Burland かも知れません。

準トラッド・フォークの双壁、Gray & Terry Woods と Richard & Linda Thompson は、各々アルバムを出しましたが、’78年の勝負の軍配は文句なくThompson 夫妻に上がりました。前作“Pour Down Like Silver”(’75年)はいささか宗教色がかちすぎて、“Bore Down Like Strip”というところでしたが、アメリカはLAセッションをバツ7にした“First Light”(Chrysalis CHR1177)は、快作。特にA面ラストのメドレーは圧巻です。“Sweet Surrender”だの、“Layla”だのどこかで聞いたようなタイトルが並んでいますが、曲は全て彼らの自



作ですので御安心を。彼らはこれを最後に音楽活動をやめるというわけもあります。けれども、このアルバムを聞いていると、それがデマであることを祈らずにはいられません。

'78年には、もう一枚、興味深いLPが現れました。

カナダのトラッドというと Kate & Anna McGarrigle の 2nd に収められたケベック・トラッドがまっさきに思い出されます。そこへ、思いがけず出現したのが、“OAK” 4号の白石氏のレビューでおなじみの Margaret Christie の “Jockey to the Fair” でした。顔容顔からシンギングのスタイルまで、まったく、カナダの Frankie Armstrong といったシンガー。彼女のようなシンガーが北米大陸に大勢いるわけではなくとも、彼女のようなシンガーもカナダにいたということは、快い驚ろきでしたし、また楽しみがひとつふえたということです。



もう一枚、番外として、Mary Asquith の “Closing Time” (Mother Earth MUMI204) をあげておきましょう。彼女は、1976年のメロディ・メイカー、フォーワ・ポール (人気投票) の女性シンガー部門で、3位にランクされています。アメリカ志向とはいえ、今は亡き Sandy Denny に匹敵する女性シンガー・ソングライターの出現はうれしいことです。Maddy Prior のソロなどよりは、命程聞く価値があります。彼女がトラッドをうたってくれないかなあ、というのは筆者の妄想です。とはいえ、ひょっとすると、かの “The North Star Grassman & the Ravens” にも比肩しうるアルバムの出現もありうるのではないかと、そんな気にさせる程見事なうたいわたりではあります。



というわけで、1978年、レコードによるトラッド・シーン展望でした。例によって独断と偏見によるものですから、もれていたり、聞き違えていたりすることは避けられません。読者諸兄の御指導をどう次第です。

それにしても、N. Jones や P. Brady のソロ・アルバムにつけられたタイトルと(い)、あるいは、レコードを聞くばかりでちっともうたわれない人々を皮肉った、V. Garbutt の “Tossin' a Wobblers” B面ラストの曲につけられたライナーと(い)、ただの偶然の一致なのでしょう。イギリスのトラッド・シンガー達が、異国の市場を意識して、アルバムをつくらせるとしたら-----。





ALBION COUNTRY BAND

“ブリティッシュ・トラッド愛好会” British Trad Appreciation Society (B.T.A.S)

会 長	松平維秋				
顧 問	森 和子				
運営委員	森 能文	遠藤斗志世	白石和良		定例会
	大山 聡	兵藤充孝	小川 彰		・毎月最終日曜日
	薄 仁				・12:00AM ~ 2:00PM
構 成	ブランク・ホーク	面野隔一			(11:00AM から来店可能)
	オパスI (榎屋真平)				・場所:ブランク・ホーク

※ 連絡先が下記に変更しました

連絡先 〒188 東京都田無市芝久保町3-15-29  
 薄 方  
 “オーケ編集部”

“OAK—British Trad Review” No.5

発行人 アリティッシュ・トラッド愛好会  
 編集人 薄 仁  
 版下製作 薄 仁

OAK — British Trad Review is published  
 by British Trad Appreciation Society

% Hitoshi Usuki 3-15-29  
 Shibakubo-cho Tanashi-shi Tokyo, Japan

1979年2月25日発行

© <無断転載を禁ず>

定価 100円

Special thanks to Folk News & Melody Maker.